*Regular Article*

# もし査読者が他の人だったら、いったいどんな査読コメントを書いただろうか？論文査読に関する短いエッセイ

浅井篤 [I]
許華 [II]
福山美季 [III]
大西基喜 [IV]
門岡康弘 [V]

**Abstract**

査読は学術雑誌に投稿された論文の価値を評価し質を向上させる大切な過程である。査読ガイドラインや関連倫理原則も発表されている。一方、査読過程は完璧ではなく、不適切な査読コメントや不正行為が指摘されている。我々は生命医療倫理領域論文の査読を受ける過程で、多くの有益な助言を得て論文を改善させることができた。しかし査読コメントを受け取り対応する過程で、いろいろを考えさせられることがあった。今回我々は著者として査読を受けてきた長年の経験に基づき、査読過程に内在すると我々が認識した根本的問題を提示したい。それらは主に、多種多様な偶然に査読者担当者及びそのコメント内容が左右される可能性と、査読者のコメントに対応する際に著者が取る不適切な態度である。我々が提示する問題は、人が他者を評価する状況で避け難く生じることであると考える。そして査読過程の本質的限界に関する認識と、過剰な能力主義に対する老子（Lao Tzu）の批判に関する理解は、著者と査読者の関係性と競争的学術活動に対する研究者の態度を健全化すると結論する。

キーワード：査読、偶然、力の不均衡、過剰な能力主義、老子

Peer review is an important process to evaluate and improve the quality of manuscripts submitted to journals. Peer review guidelines and related ethical principles have been published to improve this process. Notwithstanding, some reviewers provide inappropriate comments and misconduct can also occur. Thus far, we have been fortunate to receive

[I] 東北大学大学院 医学系研究科 公衆衛生学専攻 医療倫理学分野
Corresponding Author (E-mail: aasai@med.tohoku.ac.jp)
[II] 東北大学大学院 医学系研究科 医科学専攻（博士課程） 医療倫理学分野所属
[III] 熊本大学大学院 生命科学研究部 環境社会医学部門 看護実践開発講座 看護学分野
[IV] 青森県立保健大学大学院健康科学研究科 保健・医療・福祉政策システム領域 公衆衛生研究室
[V] 熊本大学大学院 生命科学研究部 環境社会医学部門 生命倫理学講座 環境生命科学分野

helpful advice during the peer review process from reviewers to improve our submitted manuscripts in the biomedical ethics field. Yet, in considering the process itself, we are faced with several fundamental concerns, such as the possibility that chance plays into both the selection of reviewers and their comments, and the unhealthy attitudes of authors when responding to reviewers' comments. Such issues inevitably arise in situations where people evaluate and judge others. An awareness of the inherent limitations of the peer review process and understanding of Lao Tzu's critique of excessive meritocracy can lead to more productive relationships between authors and reviewers and healthier attitudes of researchers toward competitive scholarly activities.

**Keywords:** Peer Review, Chance, Power imbalance, Excessive Meritocracy, Lao Tzu

## 1. はじめに

査読（peer review）は雑誌に投稿された論文の価値を評価し質を向上させる大切な過程である。査読は論文掲載に関する決定や他論文への投稿推奨に関する判断の一助にもなっている。ゲートキーパーであり質担保をする（1)。論文の「交通警察」であり、原稿をより適切な雑誌に導く役割も果たしている（2)。査読は無償で自主的な個人の好意に依存した作業であるが、相互性に基づいた研究者の責任であると考えられている（3, 4)。査読実施ガイドライン（Committee on Publication Ethics, COPE 等）や新しい査読様式が提案され、査読の倫理原則や求められる配慮も発表されている（3-7)。

現在の査読制度は完璧とは言えない。今まで様々な問題が指摘されている。たとえば、論文を投稿した著者（以後、著者）が精神的に深く傷つく侮辱的で無神経なコメント（4)、不合理で不必要な書き換えや追加実験の要求（5)、非建設的で大雑把で修正の助けにならないコメント（7, 8)、個人的な嗜好に基づいたコメント（9）等の存在が指摘されている。これらは著者に対するコメント作成時の査読者エチケットの欠如の問題だろう（5)。加えて、自己利益のために、競争相手からの投稿論文に不当に低い評価をつける、不適切なコメントをする、査読を故意に遅らせる、正当な理由なく採用を却下する、査読原稿からアイデアを盗用する、修正原稿に査読者自身の論文の引用を要求する等、査読者の立場を悪用した不正な行為が指摘されている（10, 11)。さらには査読者と著者が連絡し合い査読コメントを作成したり偽物査読者を立てて論文を雑誌にアクセプトさせたりといった研究不正事件も報告されている（12, 13)。

今まで我々は国内外の生命医療倫理領域雑誌に投稿した論文の査読を受ける過程で、多くの有益な助言を得て論文を改善させ発表することができた。しかし査読コメントを受け取り対応する過程で、いろいろを考えさせられることがあった。困惑させられたり対応に苦慮したりした査読コメントに遭遇することもあった。今回我々は本論で我々が著者として査読を受けてきた長年の経験に基づき、査読過程に内在すると我々が認識した問題を論じたい。我々の体験から、上述の査読者の好ましくない態度や自己利益に基づいた行為、査読に関わる研究不正の問題以外にも、より本質的で解決が難しい問題がある。具体的建設的な前向きで親切なコメントを受け取った際にも、著者として悩まされる問題である。それらは主に、多種多様な偶然に査読者担当者及びそのコメント内容

が左右されることと、査読者のコメントに対応する際に著者がどのような態度で臨むかの二つである。我々は査読過程の本質的限界に関する認識と過剰な能力主義に対する老子（Lao Tzu）の批判の理解が、著者-査読者関係と競争的学術活動に対する研究者の態度を健全化し得ると主張する。

我々は今まで、査読者のコメントによって自らの論文の議論の矛盾、不必要な繰り返し、一方的な議論、不適切な用語の使用、問題の背景についての説明不足、そして結論の具体性不足を修正できた。論文テーマに関する新たな見解、予め言及し対応すべき反論や非常に具体的な改善案、参照すべき追加文献、結論に関する代替案について貴重な意見を得ることができた。結論に関する代替案に関する提案には、代替案を採用するか否かに関する著者の裁量権が明確に与えられる場合もあった。したがって、これまで受けた査読コメントや査読者を個人的個別的に批判・非難する意図は全くない。また我々自身も査読者として長年にわたって多くの論文を査読してきており、査読者の大きな負担は身に染みて理解している。査読過程の重要性に疑問を持っているわけでもない。長年査読を受け続けてきた著者としての問題意識を論じ共有することが目的である。今回は今までに国内外の生命医療倫理系雑誌に発表できた論文の査読過程の経験を振り返りつつ論考を進める。今回は雑誌編集者が外部の研究者に査読を依頼する場合を想定している。雑誌が多数の編集委員を擁しており、常にその中から最適な査読者を選ぶことが可能な状況は想定していない。

## 2. 著者が受け取る査読コメントの内容は多種多様な偶然に左右される

我々は今まで様々な生命医療倫理学領域の雑誌に論文を投稿し、数多くの査読者から多様なコメントを受け取ってきた。しかし我々の論文の査読者は生命医療倫理学領域の研究者という共通点はあるが、査読コメントは偶々査読者になった人の考え方や認識に左右されざるを得ない。査読と言う営みは、どこまで行っても偶然性の影響から逃れられないと考える。査読は全世界共通の高性能人工知能が行うわけではない。査読は生身の完全ではない人間が行う。そして個々人の不完全さも人それぞれで違いがある。査読を行う専門家は、必ずしも全知全能かつ完全に公正な知識人ではなく、人である以上バイアスを回避することは困難である。査読過程が非公開のため、公平性、中立性、再現性を担保する術がないという指摘もある（14）。しかし、たとえ査読者名と査読過程が公開されても偶然性に左右されることには変わりない。

査読が依頼される時の査読者候補の研究者が置かれている状況で、その人が当該依頼を引き受けるかどうかが左右される。その結果、査読を引き受ける担当者が変わる。たとえば査読を依頼された研究者が、本務での倫理審査、利益相反審査、授業、院生指導、そして入試業務まで引き受けているとする。彼が査読を引き受けるか否かは本務の多忙さ加減で決まるだろう。すでに査読中の原稿を複数抱えていたら、新規査読依頼を断る研究者は多いだろう。査読者がどんな理由で査読を断っているかを正確に把握している人はいないであろう。知識があり適切な査読者を見つけるのは大変であり、中堅以上の研究者はしばしば査読を断るという（15）。この「回答率」の低さを量的調査の回答率の問題と同じように考えると、あまりに回答率が低ければ担当した査読者のコメントの妥当性に対する疑問が生じるかもしれない。様々な偶然で論文の査読者が変り、査読者が誰かによって

査読コメントの内容が左右される状況があることは避けられないように思われる。

ある研究者が査読を引き受けた場合でも査読コメントの質と量は変るだろう。多忙であれば、どうしても簡略過ぎるコメントになるかもしれない。過労状態であれば論文内容に対する理解不足や誤解が生じる可能性もある。査読のむらは当然のこととして語られている（16, 17）。査読者の個人差でも査読コメントの内容や著者への対応姿勢は変わるだろう。査読者の性格、態度、頑固さ、細かさは、個々人によって異なるであろう。たとえ利益相反がなく悪しき意図がなくても、原稿との相性という曖昧なことでもコメントは変るかもしれない。査読者個人の自らの主張や指摘の正しさへの確信度の違いも著者への対応を変えるだろう。たとえばある査読者は著者の修正された主張や議論に必ずしも納得しなくても、査読の第二ラウンドでは、その誠実な対応を評価して対応十分で採用可能と判定するかもしれない。他の査読者はあくまでも自分が完全に納得する修正ができるまで著者に執拗に修正示唆を出し続けることがあり得る。自分の考えを押し付け、研究成果を発表する機会を奪う査読者に出くわすとの指摘もある（16）。個人の認識のブレもある。一回目の査読では指摘しなかったことを二巡目の査読で追加指摘して、著者にストレスを与える査読者も存在する（18）。

複数の査読者による査読コメント内容はしばしば異なる。二人の査読者のコメントや評価が正反対のこともある（19）。我々の経験した査読では、第一査読者は論考の国際的重要性を高く評価し、具体的修正ポイントを提示し前向きな修正示唆を提示した。一方、第二査読者は我々の論考は地域限定で日本に特化したことであり国際雑誌に掲載するには値しないという見解であった。とても同じ原稿に対するコメントとは思えないこともある。複数査読者間の見解の矛盾どころか、最初の二人の査読者の意見が割れたので第三査読者が登場し、第二査読者のコメントに対する対応は論文には関係がないから不要だということがあった。第二査読者への対応のため我々は数冊の書籍を読破し論考に加えていた。まだ第三査読者は新たに読むべき書籍を示唆してきた。査読結果は多数決で決めるのかという疑問も出る。査読者の数が増えれば査読の質が良くなるとは限らない。

一人の査読者のコメントが様々な偶然で左右されるのであれば、その数が増えれば、偶然が及ぼす影響は増大するであろう。偶然で査読内容が左右されるのであれば、複数の査読者のコメントが食い違うのは必然である。査読者の雑誌掲載に関する判定の一致率は偶然の一致以上のものではないという報告もある（20）。それが査読では当たり前だと見解もあるだろうが、著者としては対応に苦慮するであろう。

字数制限以内で書かれた原稿が長過ぎるか否か、著者の議論があまりに理想主義的で非現実的か否か。この「あまりに」の部分が査読個人のよる感覚であり予測できない差異になる。何が新規なのかも個人差があり感覚的になり得る。すべてのテーマについて世界中の議論を知っている研究者はいないであろう。査読担当論文に関するテーマを毎回網羅的に検索するわけにもいかないと思われる。また偶々査読者になった人物が理解できない新規性や価値があるかもしれない。そもそも生命医療倫理領域で客観的な新規性の判断が可能なのかという疑問がある。

逆に本当に新規で、今までに学術論文に全く公表されていないことを書いた場合、学術的な文献がない、議論が先行文献に支えられていないと言

われ評価が下がる。たとえば日本で起きた守秘義務と警告義務の葛藤を含む事例に関する論文を書いたとき、その時点では誰一人その事例について学術雑誌では論じていなかったため、査読者に学術論文への言及不足を指摘された。論文における予測に基づく推論や懸念に関する先行論文がない場合、その主張に根拠がないと指摘され、すべて削るように示唆されることもある。しかし生命医療倫理領域の学術論文に先行文献がないことは新規さを示唆する一面もあると思われる。

一方で、査読者はほとんど常に論文に対して同様の評決に達するという見解もある（15）。質判断は比較的簡単だという見解もある（1）。しかし、これらは個人的見解であり本当のところはわからない。極端に質が悪い場合は簡単に採用しないという決定ができるだろう。しかし、投稿論文にいわゆる致命的な瑕疵がない場合は、査読コメントはかなり主観的・個人的になり偶然に左右されやすいと思われる。対象原稿における研究結果の再現性だけではなく、査読コメントの「再現性」も検証する必要があろう（14）。査読実施ガイドラインや査読の倫理原則が、どの程度、偶然性や個人差、主観性によって生じる査読のブレに対応できているのかは不明である。

### 3. 査読者コメントに対応する際、著者はどのような態度で臨んでいるか

査読者と著者は評価者と被評価者の関係であり、決して対等にはならない。著者の査読コメントへの対応の仕方は、査読者と論文投稿者の力の不均衡と現在の「出版するか、さもなければ滅びるか」文化（publish-or-perish culture）を考えれば改めて熟考すべき課題だと思われる。極端に言えば、従順に受け入れるか反論するかが究極的な問題になる。査読コメントに対応するとき、著者が査読者を信頼して、そのコメントに心から納得して修正要求に応じているのであれば、たとえ査読者コメントが偶然性や主観性に影響を受けていたとしても大きな問題はないと言えるかもしれない。しかし、論文が採用されることだけを目的に、とにかく従順に、ある意味「言いなり」になって修正要求に応じることもあるのでないかと危惧する。正直に言って、我々もそのような対応をしたこともあった。もし著者が論文をアクセプトさせることだけを考え、言いなりに査読コメントに対応しているのではあれば、その状況は極めて不健全であり、個人として研究者としての良心と誠実さが損なわれている状況であろう。そして査読者がミスを犯している場合、生命医療倫理という学問自体に悪影響が生じるかもしれない。査読者と著者の間に見解やスタイルの相違がある場合でも、前者が常に正しく後者が間違っている、あるいは前者が優れ後者が劣っていることにはならないと思われる。

ある日本の雑誌の編集者は「本誌では査読結果に忠実に答えようという著者が多い。ところが査読者は神ではない。時に過ちを犯す人間に過ぎない。それゆえ、査読結果には、査読者の明らかな誤解によるコメントが含まれることもある。その場合は『誤解だ』と筆者が反論して、査読者を説得すればよい。誤解によらぬ場合は、反論があるのであれば反論して決着をつければよい」（17）と述べている。まさに正論である。多くの雑誌で査読コメントに異議がある場合は詳細な反論を書くように促している。非常に適切な態度である。しかし実践はなかなか難しいと思われる。その理由は以下の通りである。

第一に査読者が公正明大で信頼できる相手かわからないため、是々非々の対応が可能か、言い換

えれば得策か否かについての不安が払拭できない。第二に査読者は著者よりも自分の方が優れていると考えて、著者の反論に耳を傾けないかもしれない（9）。第三に査読者が謙虚で公正な性格で自分のことを著者よりも偉いと思っていなくても、著者は、査読者が自分は著者よりも優れていると思っていると認識する可能性がある。これは医師が共感的で傾聴的な態度で患者に接しているにもかかわらず、患者は口を挟むと医師の機嫌が悪くなるに違いないと認識してしまい、自分の言いたいことをなかなか言えないのと少し似ている。著者の反論で査読者は腹を立て論文掲載却下を編集者に進言するのではないかと勘繰る場合はあると思われる。

英語論文投稿から査読課程、そして出版までの道のりを解説した論説では、興味深いことに「投稿先との壮絶なラリー（やりとり）」、「理不尽だと思われる指摘があれば、恐れずに反論を試みてもよい」、「（英語の査読コメントに込められた査読者や編集者の態度に関して）ネイティブスピーカーに査読者や編集長の気分といったものを、そのコメントの行間から掴んでもらうとよい」と述べられている（18）。ある意味、論文を採用させるためには、ここまでしなくてはいけないと思われている訳で、著者が査読者コメント対応に、ある意味過剰に神経を使っていることを示唆する。

ところで、今までの研究者生活で我々が取ってきた査読コメント対応には次のようなパターンがあった。第一のパターンは、査読コメントにすべて従うと言う対応である。言われるままに追加し言われるまま削除した。基本的に反論はなしである。たとえば査読者が、我々の論文中の主張はこれまで多くの既存議論があり、かつ当該記載のために論文が不必要に長くなっているため、ワンセクション、英語 1000 語、全体の 25%をごっそりと削除するよう示唆した。我々は査読者の意見に納得できなかったがその通りに削除した。また査読者が全く受け入れられないと指摘した我々の予防原則に基づく議論をまるまる削除したこともある。このパターンが過半数を占めると思われる。第二のパターンは査読者コメントには納得できないが直接的には反論はせず、説明を追加しオリジナルの議論を限定的なものに縮小することである。そして査読者が我々の限定的修正を受け入れることを願う。

第三のパターンとして、査読コメントに正面から反論し論破したこともあった（結果的に論文は掲載された）。これは稀な対応である。この場合、三名の査読者コメントのうち二名が我々の論文を高く評価した。しかし三人目が極めて低評価を下しており、その理由があまりにも受け入れがたいものであったため、全面的に対決する方針を取った。このケースでは我々が日本では医療現場の特定行為に対する複数の反対意見があり、それらに対する慎重な対応が大切だと書いた。すると、上述の三人目の査読者がそのような意見は国際的には完全に論破されており、今更国際雑誌で言及や議論の必要がないという見解であった。我々は大量の文献を提示して、当該問題は国際的にも全く意見の一致を見ていないと、その査読者の見解に反論した。このような対応にはかなりの覚悟、つまり不採用になっても構わないという決意があったことを書いておきたい。

最後に、査読者コメントに対し著者間で対応方針に不一致が生じることもあった。たとえば、論文の主旨に照らしてあまり本質的ではない大幅な修正依頼要請に対して、著者間で対応の仕方のニュアンスが異なった。第一著者は当該コメントを

受け入れることを拒絶しストレートな査読者への反論をカバーレターに書いた。しかし共同著者の一人が査読者への異論を大幅に修正し、対立的ではない内容にしたこともあった。これも査読者を可能な限り不快にならないようにするという配慮であった。加えて、複数の査読者が具体的で建設的だが、両者が全く逆方向の修正を求めてきた場合どうするかも問題となった。第一査読者は論考を簡潔にするよう示唆する一方、第二査読者はもっと文献を追加して議論を拡大させることを提案した。この場合誰に従うべきなのか。我々著者は途方に暮れた。

さらに、査読コメントは建設的で具体的であることが望まれている。しかし、それがあまりに建設的過ぎることがあり、査読者が著者に他の「建物」を建てろということもあった。査読者が特定の論文の構成を要求してくる場合、「論文の別物化」が生じてしまう。我々は何カ月もかけて論文の構成を考え、倫理的に議論が分かれている問題を国会で審議するという仮想設定を想定して議論を展開したが、査読者から国会審議の設定は不要と指摘された。我々は当該設定をすべて削除した。ある論文は日本人筆者による一冊の国際的評価の高い SF 作品を論じるものであったが、複数の査読者と査読ラウンドの結果、共通するテーマを有する数冊の書籍の評論を含む論文となった。

我々自身の経験に基づいて想像すると、著者である研究者の心理状態や彼等が置かれている環境が査読コメントへの対応態度に大きく影響する可能性がある。投稿論文の採否が昇任や研究費獲得、任用延長に影響を及ぼす場合、研究以外の業務に追われ極めて多忙で十分時間が取れない場合、所属部局長や上司から業績を伸ばすよう圧力がある場合、そしてこれらの結果として心身ともに追い詰められている場合、著者は査読者に言われるままに従うか、そのまま修正原稿の投稿を諦めることになると思われる。なぜなら多くの場合、反論には多大のエネルギーと時間が必要であり、さらにさらなる査読ラウンドと採択の可能性低下リスクがあるからだ。

心理状態および立場的に余裕があり、是が非でも目の前の投稿中の論文を可能な限り早く出版させなくてはらないという状況でないならば、研究者の良心にしたがって正面から査読者に反論ができるだろう。過度の能力主義が著者に内在化されていなければ正々堂々と議論ができるだろう。しかし現在の学術界や大学の能力主義・業績至上主義は多くの研究者の心を蝕んでいるのではないかと懸念する。魂を売る事態、つまり信念や良心を捨ててまで業績を上げようとする選択が行わることもあり得る。「より多く、より早く、そしてより良く」（“Do more, faster, and better”）が規範の世界（21）では、査読者と長い闘いをした挙句に負けてしまう事態を受け入れるのは難しい。この状況は著者の良心や誠実さに関する深刻な脅威である。

改めて著者・査読者関係とはいったいどんな関係なのだろうか。通常、生命医療倫理系雑誌の査読はダブルブラインドかシングルブラインドであり、査読者が許可しなければ編集者は査読者名を著者に通知することはできず、著者は査読者が誰かを知ることはできない。つまりこの関係では、相手が誰かわからず、直接的な意思疎通なく、特に知らないうちに相手が変わっていることもあり、時に説明が不十分であり、時に一方的な拒絶がある。これは少なくとも一般的な意味では対等な関係ではないだろう。著者は雑誌のブランドを信頼するのかもしれないが、少なくとも著者・査読者関係に信頼関係は簡単には成立しないだろう。著

者と査読者は必ずしも敵対者やライバルでないにしろ、前者にとって後者は身元不明で論文の生殺与奪権を持つ存在あると認識され得る。査読方法を変えようと編集者が一定の介入をしようと、評価する側される側の立場による違いは埋めることができない。著者・査読者関係には本質的で避けがたい力の不均等と信頼欠如があることを再確認した方がよいと思われる。

**4. 老子（Lao Tzu）から学ぶ**

「もし査読者が他の人だったら、我々の投稿原稿にいったいどんな査読コメントを書いただろうか？」という素朴な疑問が我々に本論を執筆させた。査読は偶然性に大きく左右されると論じ、編集者が査読者候補になる研究者の行動や状況そして査読引き受け判断および査読内容を完全にコントロールできない限り、偶然性の影響は除去できず、左右される査読結果には本質的な限界が生じる。このことを査読者は認識する必要があるだろう。査読者の倫理やマナーについてはすでに多くが指摘されている（1-9, 22）。しかし、これらに加えて査読者は「もしこの投稿原稿の査読者が私以外の誰かだったら、どんな査読コメントを書くだろうか」と自問して思いを巡らし、自分の見解を絶対視しないことが重要である。それが査読者自身の謙虚さに繋がり、結果的に著者を尊重することになるだろう。このことは、我々自身に対する自戒でもある。

加えて査読コメントに対応するにあたっての著者の健全とは言い難い態度についても言及し、彼等の態度には彼らがおかれている加熱した競争社会、そして研究者の不安な心理が査読コメント対応態度に悪影響を与えている可能性を示唆した。評価する者・される者の間には埋めがたい溝があり、力の不均衡がただでさえ不安定な両者の関係性を歪めていると論じた。困難ではあるが、この状況は改善が必要である。我々の主張を述べる前に今までに検討されてきた対応を述べる。偶然性の影響と「査読のブレ」を許容範囲な程度に抑え、査読者と著者の力の不均衡を是正するための制度的方策には次のようなものがあるだろう。査読者名や査読過程および内容を公開する、同一査読者への査読依頼の集中を避ける（5）、査読者のトレーニングコースを設置し査読コメントへの対応法と共に査読コメントの作成方法と自己評価法も教育する（2）、若手研究者教育において COPE 等の『査読者のための倫理指針ガイドライン』を普及し徹底する（3, 7）、利益相反管理および雑誌からの指示を遵守する等の査読者コアコンピテンシーを涵養する（6）、研究倫理の一環として査読における不正行為防止のための教育を行う（10）等である。査読の透明性を高めることで、一方的で不公平な査読が抑えられ、査読者が著者の反論に耳を貸さないといった事態もかなり避けられるものと期待される。雑誌がコンタクトできる優秀な査読者プールを大きくすることも一案だろう（23）。査読者に一定金額の謝礼を払うことで、研究者の査読に対する動機付けを高め、査読の質とスピートを改善することが期待されている（24）。

しかし制度的な限界もあるかもしれない。たとえば、ある生命医療倫理系雑誌は他の査読方法を承知しつつダブルブラインドで査読を続けている。なぜなら匿名査読は正直な査読コメント作成を可能にするからである。一方、相互にオープンな査読は同僚や知人からの投稿原稿に対して、その後の人間関係への悪影響を懸念して正直な査読執筆を妨げる可能性がある（15）。また当該領域は極めて狭く、ある研究者が以前自分の投稿原稿に低い評価を下した査読

者が書いた原稿を査読することになった時に、報復的行動にでる可能性があることが懸念されている（25）。したがって、このように制度によって不適正な査読者の態度をある程度コントロールできるが、人間の性による不適切な行為は外的制度による対応だけでは難しい場合もあるかもしれない。

残念ながら、我々にも新たな具体的な解決案はない。しかし我々からひとつだけ提案がある。以下、論文を投稿している著者が健全な態度で学問と向き合い、査読者に適切な態度で接するために重要だと我々が認識している思想を紹介したい。我々は著者には老子（Lao Tzu）の教えが重要だと考える。能力主義に屈して著者が自らの誠実さを損なわないためには、現行の「出版するか、さもなければ滅びるか」文化に対する解毒剤が必要であり、その一つとして老子の 『道徳経』（『老子』、*Tao Te Ching*）を熟読し新たな世界の見方を知ることが、我々自身を含め著者らにとって有益である可能性がある。

老子は古代中国の哲学者、詩人であり哲学的道教（philosophical Taoism）の創始者でもある。通常、彼は紀元前 6 世紀ごろ、孔子と同時代に生きたとされる（26, 27）。『道徳教』（The *Tao Te Ching*）は 2500 年前に老子によって書かれ、道教的思想の基礎となっている（28）。『道徳経』は深い哲学を持ち、宇宙論から為政者の政策、そして私たち庶民の日常の心構えまで考えさせてくれる（29）。Baldock は、『道徳経』が書かれた 2500 年前と現代は、我々人間が争いをやめることがなく、権力と地位を追い求め、富を所有することに強迫的になっているという点で何ら変わることはなく、『道徳経』がもたらす知恵は現代社会においても 2500 年前と同様に重要である、と論じている（30）。 老子はめまぐるしく変転する時代の流れに押し流されまいとして、つねに内省と状況判断を怠らなかった。この意味で常に主体性喪失の危機にさらされている現代人にとって老子の生き方はひとつの指針となる(31, 28)。老子は名声、利益、欲望、知識の 4 つが人間社会に混乱をもたらすと示唆する（27）。

『道徳経』から「出版するか、さもなければ滅びるか」文化に対する解毒剤になり得、著者が健全な姿勢で査読コメントに対応できると我々が考える老子の言葉（章からの一部抜粋）から 6 つの例を取り上げ以下に列挙し、それぞれに関連付けて、研究活動と査読対応、そして研究者の在り方について我々の考えを述べる。John H McDonald の英訳版から引用した文章および我々の日本語訳を記載する（27）。文頭の番号は章ナンバーである。我々は七冊の『道徳経』の日本語訳および四冊の英語訳を詳細に検討した。今回中国人留学生で第二著者の許華がオリジナルの『道徳経』中国語版と比較して最も的確に内容を表し、翻訳者個人の見解が入り込まず、同時に現代に生きる我々に有益な現代的解釈をしていることを理由に John H McDonald の英語版を用いた。そして共同筆者全員で我々の日本語訳の妥当性を確認した。

本論では『道徳経』の基本概念である「道」および「無為自然」については言及しない。また『道徳経』は極めて多様な解釈が可能であり、今回我々が用いた英語訳はその解釈の一つであり、他の英語訳版や日本語訳版よりも、客観的で優れている主張するつもりはない（26）。

2 *When people see things as beautiful, ugliness is created. When people see things as good, evil is created…Long and short define each other.*

*人が何かを美しいと認識した時に、醜いという*

*概念が生まれる。人が何かを善いと認識したときに悪という考えが生まれる….長さと短さがお互いを定義する。*

著者は、元々この世には優劣を区別する普遍的基準など存在しないことを理解すべきだろう。結局のところアクセプトの判断は査読者個人の作為すなわち主観的評価であり、学術的な意義や価値は絶対的ではない。したがって査読者の評価ばかりに拘ると、学術的な主張が偏ってしまう可能性があり、自らの主張を歪めることにもなりかねない。それよりも、自己の論文の質を徹底的に追及することに注力し、時期や場所に関係なく多くの研究者によって支持あるいは賛同される学説を見出そうとする姿勢がもっと重要である。

3 *If you over-esteem talented individuals, people will become overly competitive. If you overvalue possessions, people will begin to steal. Preferring simplicity and freedom from desires, avoiding the pitfalls of knowledge and wrong action.*
*もしあなたが才能のある人を過大に評価するならば、人々は過剰に競争的になるだろう。もしあなたが所有物に過剰な価値を見出すなら、人々は盗みを始めるだろう。単純さと欲望からの自由になることを好み、知識と誤った行為の落とし穴をさけよう。*

今日、論文のアクセプトそして業績の積み上げを無視して研究活動を行うことはほぼ不可能である。雇用や出世をふくむ自らの仕事そして生活基盤にも大きく影響するからである。しかし、それらが過剰になり自己目的化すると、論文著者は自らの学問的信念や良心に背いて学術報告を行い、結果的に不満、不安あるいは後悔といったネガティブな心理状態に陥るかもしれない。あるいは、研究不正を犯す者がいるかもしれない。したがって、彼らは査読者から受けるプレッシャーや業績に関する欲望を適度に制御できなければならない。そうすることで、自らの満足のいく成果報告が可能になるだろう。

13 *Success is as dangerous as failure, and we are often our worst enemy. Receiving favour and losing it both cause alarm. The reason I have an enemy is because I have 'self.' If I no longer had a 'self,'I would no longer have an enemy.*
*成功（昇進）は失敗（失脚）と同じように危険である。そして我々はしばしば我々自身の最悪の敵である。寵愛を受けることもそれを失うことも共に警戒心を抱かせる。私に敵がいる理由は、私が自意識を持っているからである。過剰な自意識がなくなれば、敵はいなくなる。*

論文がアクセプトされて上司から評価され昇進できた場合でも、業績が伸びずに出世できない場合と変わらず、注意が必要である。出世すれば幸せになるとは限らないし失うものも多い。そして上司の気まぐれによって、その評価や地位を失う可能性は常にある。他者の評価で自己を評価してしまうような、対他的に過剰な自意識は捨てた方がよい。

24 *Those who stand on tiptoes do not stand firmly. Those who rush ahead do not go very far.*
*つま先立ちをする人はしっかりと立つことはない。先を急ぐ人は遠くには行かない。*

見せかけやオーバーワークといった姿勢で作成された論文は良質だろうか。結局、そのような執筆の努力は失敗するだろう。そして、査読者もそのような態度の著者を好むはずがない。彼らに無理に気に入られようとするうわべだけの努力は徒労である。それよりも著者はじっくりと作成途中の論文の内容に向き合い、その品質向上に努めるべきである。すなわち、先述したように、時期や場所に関係なく多くの研究者によって支持あるいは賛同される学説を追及すべきだろう。このような姿勢が優れた成果報告への近道なのかもしれない。急いては事を仕損じることを肝に銘じる必要がある。他人より優れていようと努力し、自分を追い込み義務を守らない研究者は自分自身と他人を傷つけることになろう。

33 *Those who know others are intelligent: those who know themselves are truly wise: Those who master others are strong: those who master themselves have true power. Those who know they have enough are truly wealthy.*

*他者のことを知る人は知的であるが、自分自身のことを知る人は本当の知恵がある。他者に打つ勝つ人は強いが、自分に打つ勝つ人は真に力がある。足るを知る人々が本当の意味で豊かである。*

アカデミアは競争社会であり、生き残るためには他の研究者を倒す必要がある。しかし、もっと大切なことは自己理解や自己鍛錬の習慣であり、これらは自分が成長するための本質的な手段である。研究者として、自分の欠点や無知を常に思い出し常に反省して、自分自身を真に理解できるように努力する必要がある。自己の欠点と弱点を理解し他者に協力を求めれば、他の研究者との良い人間関係が形成され、優れた学術研究の協力や支援を受けることができるかもしれない。そして、結果的に、査読者の指摘に効果的に応答できるだけでなく、発表する成果は他の多くの研究者からも好ましい評価を受け、優れた業績へつながっていく可能性もある。また、他者との比較を止めて、自分が研究者として今までなし得たことに「これでよし」という満足感を持つことができれば、人生がより豊かなものとして実感されるだろう。

44 *Which is more valuable, your possessions or your person? Knowing when you to stop will keep you from danger.*

*あなたの所有しているものとあなたの人格のどちらがより大切なのか。いつ辞めるかを知ることで危険を遠ざけることができる。*

研究者は業績の積み上げに没頭しすぎると、他の重要事項を知らぬ間に失うことがあるかもしれない。たとえば心身の健康状態や家族・同僚との人間関係を損なう研究者がいる。あるいは同じ分野の研究者から強い反発や妬みを受けるなら、研究成果が不当な評価を受けるかもしれない。そのような不幸を回避し、健全な研究活動を安定して持続するためには、謙抑や節度を備え、自分がおかれた環境に順応するのがよい。我々は名声・名誉を非常に重要視するが、そのために命を犠牲にするのは本末転倒である。そして、欲望が大きければ大きいほど満足は小さくなるであろう。

日本の精神科医の野村は『道徳経』から次のようなメッセージを受け取り、現代社会において自分の境遇に悩み劣等感に苦しんで活力を失ってい

る人々に送っている。現代社会の人々は様々な局面で無意識に優劣をつけ、勝ち負けを意識し、他者を上に見たり下に見たりして、自分勝手に序列をつけ、時に劣等感を抱いてしまう。しかし価値は相対的で絶対的な基準など存在しない。ほんとうに偉大なものは決して完成などしないし、「何かを成し遂げた」なんて必ずしも言い切れない。「役に立つ」「役に立たない」なんてそう簡単には決められない。だから人間は、自分と他人を比べるのをやめ、何が正しいか何が良いか悪いか、何が幸せか、どんな人が偉いかを決めつけるのをやめるべきである（32, 29）。同様に蜂谷も『道徳経』は、常に管理された競争社会で生きている人々にとっての心の処方箋であり、常識に凝り固まった考えを打破し、日常のしがらみから人々の心を解放すると述べている（33, 30）。加えて中国の研究者らは、『道徳経』には知識偏重主義批判が含まれると指摘し、同書には知識量が多いことを無条件に讃えないこと、自らの知識を誇示しないこと、我々の知恵や物事の本質に関する理解の限界および善悪判断の困難さに関する認識の重要性、そして自分の見解を他者が認めるように傲慢に強要しないことの重要性が示唆されていると述べている（34, 35）。

さて結論を述べる前に老子と生命倫理学との関係性および著者らの老子および『道徳経』に関する姿勢を述べておきたい。生命倫理学は主に医療および生命科学の発達に伴い生じる倫理的心理的文化的社会的な問題を、学際的に様々な方法を用いて考える極めて広い領域である。老子による『道徳経』は２５００年以上前に書かれたと言われており、長きにわたって多くの研究者に様々な解釈がなされてきたが唯一絶対の解釈は未だに定まっていない。そして各個人の生きる時代、その個人の人生の段階によっても『道徳経』からその人がくみ取るメッセージは変り得る（36）。ある人は現代社会での生き辛さを軽減するコメントに注目し（32）、他の人は現代社会に生きる手掛かりを得ている（33）。我々も同様に研究者/論文投稿著者の健全な態度に資する部分を抜き出した。『道徳経』で述べられている老子の思想は謙虚さを重視した徳倫理、つまり生命医療倫理の主要分野の一つであると捉えることもできる（36）。

無為は単に何もしないことではない、余計なことはしない、ことさらな作為や賢しらな行動、小細工を弄しないと解釈される。作為は長続きしないので無理はやめようという意味である（29, 37）。老子が否定したのは道徳そのものではなく、忠孝の偽装、偽りの博愛、偽りの正義であり、世の中の社会的混乱を避ける方法を人々に警告していたことを読み取ることができる。老子の思想は深遠かつ包括的で尽きることがなく、社会政治、外交、経済、法律、教育問題から、人間の倫理の機微、人生観、価値観、世界観、健康など多岐にわたっており、生命倫理学の営みと重なる部分が大きいと言えるだろう。老子は人間として何をするにしても学問や研究をするにしても、雑念を持たず敬意を払い慎重で謙虚でなければ、多くの弊害や問題を生むことになると繰り返し説いている。ひとつの事柄に固執しないことも重視している。したがって、老子は学問や研究自体を否定しているわけではない。

さらに老子は、私たちの生き方を自然の法則と一致させ、それに反しないようにすることが大切だと述べている。生命医療倫理領域の考察にはキリスト教に基づく自然法に基づく考えや自然主義的な考え方があり歴史的に大きな影響力を持ってきた。同様に、老子のいう自然とはどのような状

態なのかを真摯に追及する営みは優れて生命倫理的な営みだと考える。したがって老子の思想と生命倫理の思想は重なる部分が多いと思われる。著者らの一部は 30 年近く生命医療倫理学の教育研究者として大学で働いており、自らのライフワークである当該学問を否定する意図は毛頭ない。加えて言えば老子および『道徳経』に関する生命医療倫理領域の学術論文も国内外で複数出版されている（38-40）。

我々は老子の思想および道徳経の内容をすべて理解していると主張する意図は全くない。たとえば我々は道と何か、自然とは何かを具体的には理解していない。また『道徳経』には人間の生き方と同時に出世のための処世術が書かれている。しかし我々は出世する方法や国を治める知恵について全く興味はないし、彼の見解に必ずしも賛同していない。このように、老子の思想及び『道徳経』の内容の全体像および全体を貫く哲学を理解することは難しく、また内容的に一貫しているとは言い難い。相互に矛盾している部分もある。しかし我々は『道徳経』に書かれた言葉の一部から、現代をより良く生きる手掛かりを得ることができると考える。

老子が生きたとされる時代や『道徳経』が成立した時代は現代とは全く異なる戦国時代で王が人民を支配している時代であった。しがたって現代の民主主義や自由主義、個人の人権尊重が基本となっている主流の生命倫理の見解から、『道徳経』の内容の一部を現代的には無意味なものであるとか、現代生命倫理の諸学者には受け入れられないとする見解は理解できる。しかし 2500 年もの過去の王朝乱立時代に生まれた考え方の妥当性を、現代の倫理基準から後方視的に断定的に判断することには問題があると思われる（41）。そのような姿勢は、たとえば、アリストテレスの思想を彼が生きた時代が奴隷制を敷いており彼もそれを非難していなかったことを理由にまるごと否定する、またはヒポクラテスが人工妊娠中絶や安楽死を完全に否定していることを理由にその現代的な意義を否定することに類似していると思われる。

我々は現代の業績至上主義が『道徳経』を読むことですべて解消されると主張してはいない。論文著者/研究者が時には老子の謙虚で多くを望まない、世間の価値に囚われない、そして賢しらことさらな行為を慎もうという見解を読んで心を落ち着かせ、人生の意味や学問をする意味を少し立ち止まって振り返る時間を取ったらよいのではないかと述べているだけである。

## 5. 結論

老子のメッセージを読んで、少しだけ立ち止まって自分の在り方を考えることは有用であろう。好ましい人生の送り方とは何かを考え、今現在の自分の研究者としての生き方を少し疑問に思うだけでも、論文投稿と査読コメント対応に関する心労や卑屈な心理、不正への誘惑が低減するのではないだろうか。査読者とのやり取りでも是々非々で正々堂々と対応できると思われる。いつの間にか思い出すことがなくなった、医療倫理を始めた目標を再認識し、初心に帰ることが肝要である。そもそも何のために論文を書いて投稿するのか。なぜ生命医療倫理について書いて公表しようとするのか。我々の中には、医療倫理の実践と当該領域の研究活動によって日本の医療の倫理的問題を解決すると同時に本邦の文化的傾向を変革し、日本の医療を変えるという大義を持って医療倫理を始めた者もいる。このような初心に『道徳経』を読むことで戻ることができるかもしれない。そして、

研究業績を上げることばかり、そしてランキングを挙げることばかりに終始する大学等の学術機関を醒めた目で見る必要がある。

評価され続ける社会に心の平安はない。評価され続ける人生で我々は疲弊する。そして達成と活動性だけで評価される社会は我々を過度に消耗させる（42, 33）。評価され続ける人生は、個人の存在意義に対する根源的不安を惹起する。科学や学問の世界においては相互批判が大切だが、人が人を判断することの意義と影響をもっと真摯に考えるべきである。評価し優劣をつけ待遇を変えることの意味とインパクトを再検討する必要がある。我々は現代社会で論文投稿をする著者を含めた研究者らは心の平安と休息のためにも、老子のメッセージを一度しっかりと受け止める必要があると結論する。

最後に、今回は査読コメント対応における著者に対する『道徳経』の意義を述べたが、研究者が査読者の立場になった時にも、彼等がより良い、つまり適度に建設的で謙虚な査読コメントを著者に提供できる手掛かりを老子は残している。たとえば第 71 章では「知らないことを知ることが人を完全に近づける。知っていると思うことは病気である。病気であることを認識することによってのみ、治療を求めることができる。」と述べている（27）。査読者になる可能性にある研究者、すでに査読を担当している研究者にも『道徳経』の一読をお勧めする。

## 文献


1. David Wendler, Franklin Miller The ethics of peer review in bioethics. *Journal of Medical Ethics* 2014;40:697-701.
2. Kayhan Parsi, Nanette Elster. Peering into the future of peer Review. *The American Journal of Bioethics* 2018;18:3-4.
3. COPE Council. COPE Ethical guidelines for peer reviewers — English. https://doi.org/10.24318/cope.2019.1.9
4. Bressington D, et al. Conducting a sensitive, constructive and ethical peer review. *Nursing Open* 2021;9:1930-2.
5. Katrin Karbstein Responsible Peer Review. *ACS Chem. Biol*. 2018, 13, 3217-8.
6. Edward Barroga Innovative Strategies for Peer Review. *J Korean Med Sci* 2020 35 (20) e138.
7. Heidi Allen, Alexandra Cury, Thomas Gaston, Chris Graf, et al. What does better peer review look like? Underlying principles and recommendations for better practice. *Learned Publishing* 2019;32:163-175.
8. Catherine M. Clase, Elizabeth Dicks, Rachel Holden, Manish M. Sood, et al. Can peer review be kinder? Supportive peer review: A Re-Commitment to kindness and a call to action. *Canadian Journal of kidney health and disease* 2022;9:1-6.
9. Paivi Atjonen Ethics in peer review of academic journal articles as perceived by authors in the educational science. *J Acad Ethics* 2018;16:359-376.
10. Edward F. Barroga. Safeguarding the integrity of science community by restraining ‘Rational Cheating’ in peer review *J Korean Med Sci* 2014;29:1450-1452.

11. Jaime A. Teixeira da Silva. The ethics of peer and editorial requests for self-citation of their work and journal. *Medical Journal Armed Forces India* 2017;73:181-183.
12. Horacio Rivera. Fake peer review and inappropriate authorship are real evils. *J Korean Med Sci* 2019;34:e6.
13. 教授ら 3 人査読不正 福井大調査委、論文 6 本で認定 浜松医大元教授関与 静岡新聞、2022 年 12 月 21 日
14. Takeshi Ebata. The quality is mightier than the duration: High quality of peer review makes journal attractive. 人間工学 2021; 27:1-3.
15. Udo Schuklenk On peer review, Editorial. *Bioethics* 2015;29: 2-3.
16. 高橋浩之 日本健康教育学会誌の「査読」を査読する 日本健康教育学会誌 2011;19;353-354.
17. 神馬征峰 日本健康教育学会誌の査読：理想と現実のはざまで 日本健康教育学会誌 2011; 19:354-355.
18. Paul Andrew 佐藤晴彦 英語論文の投稿から査読者のやりとり、そして出版 理学療法学 2019 年第 46 巻 465-9.
19. Barry London, Reviewing Peer Review. *Journal of the American Heart Association* 2021;10:e21475.
20. Frank Houghton Keep calm and carry on: moral panic, predatory publishers, peer review, and the emperor's new clothes. *Journal of the Medical Library Association* 2022;110:233-239.
21. Drolet MJ, et al. Ethical issues in Research: Perceptions of Researchers, research ethics board members and research ethics experts. *Journal of Academic Ethics* 2023;21:269-292.
22. William A. Cunnningham, Neil. A. Lewis, Jr., June Gruber. Letters to Young Scientists. Science relies on constructive criticism. Here's how to keep it useful and respectful. *Science* 2021 (March 4, 2021) doi: 10.1126/science.caredit.abi6902. https://www.science.org/content/article/science-relies-constructive-criticism-here-s-how-keep-it-useful-and-respectful#:~:text=It%20simply%20means%20that%20when,people%20away%20from%20the%20community
23. Aluko A. Hope and Cindy L. Munoro. Criticism and judgement: A critical look at scientific peer review. American Journal of Critical-Care Nurses 2019; 28:242-245.
24. Phaik Yeong Cheah, Jan Piasecki. Should peer reviewer be paid to review academic papers. Lancet 2022; 399: 1601
25. Udo Schuklenk How peer review is conducted at Developing World Bioethics, and why we do ti the way we do. Editorial. *Bioethics* 2019;19: 62-63.
26. Paul Meighan The Tao Te Ching, or the Canon of the Way and the Virtue. In Laozi. Tao Te Ching The Canon of the Way and the Virtue. Translated by John Alexander. Easy Peasy Publishing 2014. 6-19.

27. Lao Tzu *Tao Te Ching* Translated by John H McDonald. Arcturus Publishing Limited, 2019, London.
28. Lao Zi Dao De Jing 居延安 翻訳・編集 上海翻訳出版社、2019 年.
29. 野中根太郎 老子コンプリート 誠文堂新光社、2019 年、東京.
30. John Baldock. Introduction, in Lao Tzu Tao Te Ching Translated by John H McDonald. Arcturus Publishing Limited, 2019, London, 6-19.
31. 和田武司 解説 In 蔡志忠（さいしちゅう Tsai Chih Chung）作画、和田武司訳、野末陳平監修 マンガ 老荘の思想 講談社文庫、2021 年、東京.
32. 野村総一郎 人生に、上下も勝ち負けもありません。精神科医が教える老子の言葉 文響社、2019 年、東京.
33. 蜂谷邦夫 老子 NHK テレビテキスト 2018 年第 1 巻、29.
34. Xu Chengzi. A New Interpretation of the TAO TE CHING,Jinan Press, Shan Dong, 2003,P66. In Chinese.
35. Zeng Shiqiang explains the TAO TE CHING[M]. Democracy and Construction Press, Beijing, 2016, 163-165. In Chinese.
36. 老子 蜂谷邦夫訳注 岩波文庫、2016 年、東京.
37. 守屋洋 世界最高の人生哲学 SB クリエイティブ株式会社、2016 年、東京.
38. Liam C. Butchart. Taoism, bioethics, and the COVID-19 Pandemic. Tzu Chi Medical Journal 2022;34:107-11
39. 関根徹 日本の天道的な医療倫理—道教思想の影響 鶴見大学紀要 2022;48:51-55.
40. Russell Kirkland Taoism, Bioethics in. Bruce Jennings, Editor in Chief. Bioetihcs, 4th Edition, Volume 6, 2014, Gale, Cengage Learning, Farming Hills, p3059-3068
41. Atsushi Asai, Hiroko Ishimoto, Sakiko Masaki An ethical review of the production of human skeleton models from autopsied patients with Hansen’s disease in pre-war Japan. *Ritsumeikan Journal of Asia Pacific Studies* 2014; 33: 153-161.
42. Byung-Chul Han The Burnout Society. Translated by Erik Bulter, Stanford University Press, Stanford, California, 2015.

（2023 年 7月 8 日受理／2023 年 9 月 8 日採択）